

近距離コミュニケーションこそ「ヒト」を人たらしめている要因

私は電車で通勤しているが、この数年、駅や電車の中の風景は大きく変わったと思う。かつて、ゲーム機やスマホなどに夢中になることは若者の専売特許のようなものであった。ところが、今や老若男女を問わず、画面をのぞき込み、忙しく指先を動かしている。それぞれが非常に近くに座り、あるいは立っているのだが、相互の関心は皆無

とってよい。先日、優先座席に座りながらスマホに夢中になっている複数の若者の前に、お年寄りも赤ちゃんを抱えた女性が立っている場面に出くわしたが、その存在は彼らの視界には入っていないかのようにであった。こうした状況に苦言を呈したいわけではない。これも氷山の一角と諦める前に、われわれがどのような時代の中

こそ、ヒトを人たらしめている要因であるといってもよい。人間のようには、顔の表情一つで微細な感情を分かち合うことのできる動物は他に存在しない。日本では、人と人の繊細な感情のやりとりを土台にして、人と動物や自然との間のつながりの意識も繊細な形で育まれてきた。自然の事物の中にも表情を読み取るうとする感覚は、日常的な近距離コミュニケーションがあつてこそ成立するものだろう。あるいはインターネットでもかなわない、先祖との交流といった遠距離コミュニケーションも、やはり家族の親密な交わ

りの中に基礎付けられてきた。急速な変化の中で、人の顔を見ないで済む遠距離コミュニケーションだけが一方的に拡大すると、どうなるのだろうか。たとえば、遠隔操作によって人を殺害することのできるドローンは、この時代の副産物であるだけでなく、それは私たちのもう一つの顔でもある。人の顔に表れる不安や喜びを受け止めることのできる共感の能力、電子ネットワークのただ中にありながら、大地や自然の息づかいを感じることできる身体性。新年にあたって確認すべき事柄は身近にある。



●こはら・かつひろ
1965年、大阪市生まれ。同志社大学院神学研究科博士課程修了。博士(神学)。一神教学際研究センター長(2010-15年)、京都・宗教系大学院連合議長(13-15年)などを歴任。現在、同志社大神学部教授、良心学研究センター長。専門はキリスト教思想、宗教倫理学、一神教研究。『宗教のポリテイクスー日本社会と一神教世界の邂逅』ほか著書多数。



小原 克博
同志社大学 良心学研究センター長

で生きているのかを、時々立ち止まって考えることは大切だろう。社会の近代化の中で「より遠くへ、より速く」という価値観が尊ばれ、交通網だけではなく、通信技術が目覚ましく発展し、世界は小さくなつていった。遠距離コミュニケーションの革新の恩恵は計り知れない。

しかし、「ヒト」が他者と向き合つて、その顔の表情を読み取り、感情を共有し、必要な手助けをするように進化してきた歴史は、数百年どころの話ではない。長い進化のプロセスの中で獲得してきた近距離コミュニケーション

『京都新聞』「日本人の忘れもの知恵会議」2016年1月1日

まとめ

伝統的神学の再検討

- ・ 西欧の伝統的神学は「**普遍的**」であることに価値を置いてきた。
- ・ しかし、それは本当に普遍的なものだったのだろうか？

西欧神学の相対化と現代神学の多様性

普遍性

- ・ 文化
- ・ 人種
- ・ 性
- ・ 階級
- ・ 宗教
- ・ 種

- ・ 西洋文化
- ・ 白人
- ・ 男性、異性愛
- ・ 支配階級
- ・ キリスト教
- ・ ホモ・サピエンス

現代神学の多様な潮流

- ・ 世界大戦のただ中から
- ・ 終末論
- ・ 解放の神学
- ・ 宗教の神学
- ・ 黒人神学
- ・ エコロジーの神学
- ・ フェミニスト神学
- ・ 動物の神学

神学とコンテキスト

〈誰が〉

〈どこで〉

〈何のために〉

〈どのような〉

神学を必要とするのか

現代神学および宗教を学ぶ意義

- ・ **現代のコンテキスト**を理解する。
- ・ 近代化、世俗化、多元化、グローバリゼーション、宗教復興（再聖化）
- ・ キリスト教の**多様性**を認識する。
- ・ 教派的多様性はその一部に過ぎない。
- ・ 宗教を知るとは**人間を知る**ことである（→リアリティの認識）。
- ・ 宗教は、人間の両極端を見極めるレンズの役割を果たしている。

リアリティの認識

- ・ 様々な神学的思索と実践が前提としているリアリティをどのように共有することができるのか。
- ・ 解放の神学が前提とする「貧しさ」
- ・ 黒人、女性、LGBT の「苦悩」
- ・ 対立する価値、宗教と宗教の間の「軋轢」「緊張」
- ・ エコロジエーの神学が視野に入れようとする自然の命の「うめき」
- ・ 工場畜産や動物実験の犠牲になっている動物たちの「無言」

情報化社会のリアリティ感覚

- ・ ネット依存：手放せないスマホ、やめられないオンライン・ゲーム
- ・ リアルのバーチャルへの従属：SNSへの投稿、ネット上での商品評価、欲求のビッグデータ化
- ・ インスタントな「答え」への依存：Google検索による皮肉な画一性
- ・ リアルな人間関係からの逃避：多文化社会の中での閉鎖的人間関係（移民社会の新たな課題）

リアルとバーチャルの長い歴史

- ・ 人類は太古の昔から「**バーチャル**」を意識してきた。
- ・ 日常世界と超越的世界の交流。生者と死者の交流。人間と動物の交流。
- ・ リアルとバーチャルの平衡を見出す知恵としての「不在者の倫理」
- ・ 今生きている「私」は無数の「過去の不在者」の上に生かされている。そして「未来の不在者」が生きる世界を作っている。アトム的な個の充足を超えたコスモロジカルな自己理解への想像力。

神の国のリアリティ

- ・ イエスによる「神の国」のたとえ
- ・ 「たとえを用いずには語ることはなかった」（マルコ4:34）
- ・ 誰にでも理解できる日常的な素材（からし種、パン種等）から構成されていた。
- ・ リアルとバーチャルとの二者択一的な問いを拒絶する
- ・ 熱心党（政治的な「神の国」：リアル志向）とクムラン教団（超自然的な「神の国」：バーチャル志向）の比較
- ・ リアルとバーチャルの間の往還運動の中で、新しいリアリティを紡ぎ出していく。

よりよい世界を作るために

- ・ 世界はなぜ簡単に変わらないのか？
- ・ 無関心と既得権益
- ・ 「愛の対極にあるのは憎しみではない。無関心である。美の対極にあるのは醜さではない。無関心である。知の対極にあるのは無知ではない。それもまた無関心である。平和の対極にあるのは戦争ではない。無関心である。生の対極にあるのは死ではない。無関心、生と死に対する無関心である。」（エリ・ヴィーゼル）
- ・ 新島襄「良心の全身に充滿したる丈夫の起り来たらん事を」
- ・ 良心（conscience）の原義は「共に知る（考える）」
- ・ 「良心を世界に——良心を覚醒させる知の連携と知の実践」